

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 塩谷哲史

乾燥地域である中央アジア南部オアシス地域では、歴史を通じて灌漑による農業生産が社会の存立を支えてきた。したがって、灌漑史の研究は中央アジア史の展開を理解する上で欠かすことのできない領域であり、V.V.バルトリド『トルキスタン灌漑史』(1914年)はその古典的な研究として名高い。しかし、19世紀からロシアによる征服を経て20世紀前半のソビエト政権期に至る近現代史の中で灌漑がどのような意味を有したか、これに関する研究はきわめて少なかった。このような研究状況に対して、本論文は中央アジア有数の大河、アム川下流域のホラズム地方に成立したコングラト朝ヒヴァ・ハン国の灌漑政策に注目し、これを通してハン国の権力構造の変化、帝政ロシアの保護国時代における干渉と開発の実態、ハン国内における民族間対立の激化を明らかにすることを意図している。主要な史料としては、チャガタイ語によるヒヴァの年代記・文書とロシア語による帝政期の政府、植民地行政、企業関係の多彩なアルヒーフが利用されている。

本論文はまず、コングラト朝政権が1830年頃に起ったアム川の氾濫を契機にラウザーン運河を開削し、新しく開かれた灌漑地にトルクメンなどの集団を入植させるとともに、彼らの軍事力を対外遠征に活用したことを確認する(第1章)。次に1873年ヒヴァ・ハン国がロシアの保護国となった後の、ロシア政府および灌漑事業家によるラウザーン運河の開発構想と事業の展開を考察し、それが現地の条件の理解不足、また国境に関する規定の不備のために矛盾を露呈させ、むしろコングラト朝政権に対するトルクメンの反発を招いたことを明らかにする(第2章)。続く第3章では1910年代の新ラウザーン運河における大規模灌漑事業をめぐるロシア企業家とコングラト朝政権の交渉と双方の意図、最後の第4章ではこの事業に対するロシア政府、具体的にはクリヴォシェイン率いる土地整理農業総局の干渉が事業の挫折とコングラト朝政権の弱体化、とりわけ国内反対勢力としてのトルクメンの台頭をもたらしたことを指摘する。

このように本論文はラウザーン運河に関わる主要なアクター、すなわちコングラト朝政権、トルクメン、ロシア政府、企業家、トルキスタン総督府などの意図と行動を一次史料から丹念に読み解き、灌漑史の観点からヒヴァ・ハン国の興亡を描くことに成功している。とりわけ、トルクメン対ウズベクという対立の構図がロシアの保護国期に灌漑事業の失敗によって強化されたという指摘は、ロシア革命後の中央アジアにおける民族・共和国境界画定(1924年)の背景を考える上でも重要である。これによって歴史的なホラズム地方はウズベク、トルクメン両共和国に二分されることになったからである。本論文はチャガタイ語史料の読解や農業史に関する記述の不足などについて改善の余地を残すとはいえ、全体として中央アジア近現代史研究に新しい視座と実証的な成果をもたらしたと評価することができる。以上のことから、審査委員会は本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしい論文と判断するに至った。